

プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての 児童館の利用実態

—神戸市における来館児童を対象とした調査事例—

梶木 典子, 瀬渡 章子*, 田中 智子*

(奈良女子大学大学院人間文化研究科, * 奈良女子大学生生活環境学部)

原稿受付平成 12 年 6 月 26 日; 原稿受理平成 13 年 3 月 8 日

A Study on Actual Usage of Children's Halls as a Play Space with
a Play Leader in Community Area

—A Case Study of Users at Children's Halls in Kobe City—

Noriko KAJIKI, Akiko SETO* and Tomoko TANAKA*

*Graduate School of Human Culture, and * Faculty of Human Life and Environment,
Nara Women's University, Nara 630-8506*

The authors regard a children's hall as community play space where a play leader is stationed. This study aims at clarifying the actual use of these facilities and the relation between children and their play leader. The authors selected three children's halls in Kobe and conducted questionnaire researches on the children who visited the halls. The findings are as follows:

1) Half of the children visit the hall as often as more than twice a week. Some make no arrangements with friends; they visit the hall of their own accord. Most come to play with friends or take part in various events offered by the play leader.

2) Children regard the hall as an attractive place. They get to meet their playmates; a rich variety of plays is offered there; and new plays are introduced by the play leader.

3) The relationship between children and the play leader mainly depends upon how much children approach the play leader. Frequent visitors have stronger ties with the play leader. It should be pointed out that visitors need a play leader who is willingly to be involved with children's play while supporting their activities.

4) The children's halls should make more efforts to approach the children in the community, and the play leader's role should be strengthened, in order to make the hall as play base that children would want to visit and have a nice opportunity.

(Received June, 26, 2000; Accepted in revised form March 8, 2001)

Keywords: children's hall 児童館, children 子ども, play 遊び, play leader プレイリーダー, local children's facility 地域児童施設.

1. 緒 言

子どもにとって遊びは、身体的・精神的・社会的発達上、重要な役割を担っている。しかし、今日の子どもの遊びを取り巻く状況は、仙田等^{1)~3)}が指摘しているように、遊び時間・遊び空間・遊び仲間の減少とともに遊び方法の貧困化が著しく、これらが相互に影響しながら、遊び環境は質的・量的にも悪化しているといえる。特に、都市化の進行の著しい地域では、子

どもが自由に遊べる屋外空間は限られ、貴重な子どもの屋外遊び場である公共の公園ですら、犯罪に遭う危険をはらんでいたり、禁止事項が多かったり、近隣の大人の苦情が多かったりと、子どもが自由に安心して遊べる空間となっていないのが現状である。本来、子どもの遊びは自由で自発的であり、ほおっておいても、勝手にのびのびと遊ぶことが自然な姿である。しかし、前述のような危機的な状況下では、大人も子どもの遊

びにたいして樂觀視してはおられず、大人が子どもの遊びに関わり、積極的に支援する働きかけが必要になってきていると考えられる。

著者らはこれまで、これからの子どもの遊び場には、「大人が、プレイリーダー⁴⁾⁵⁾として常駐し、子どもの遊びに関わり・見守り、支援すること」が重要な要件になるであろうという仮説に基づき研究を進めてきた⁶⁾。これまでのプレイリーダーの常駐する遊び場の研究においては、専任のプレイリーダーが常駐することにより、子どもがのびのびと、自由に、安全に多様な遊びを展開できる魅力ある遊び場として高く評価されていることが明らかになり、遊び場にプレイリーダーが常駐することの重要性が確認された。しかし、研究対象とした遊び場が会員制という利用者を限定したものであったため、誰でも、いつでも、遊びに行ける日常的な遊び場となり得ていないという問題点が浮き彫りになった。

そこで、本研究では、これまでの研究結果を踏まえて、①プレイリーダーが常駐する、②いつでも、だれでも、自由に利用できる（施設のオープン性）、③子どもの徒歩圏内に設置されている、という3条件を満たす可能性が高い地域の既存の遊び場として「児童館」を研究の対象とする。児童館は、1947年の児童福祉法の制定に伴い、「児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、または情操を豊かにすることを目的とする施設」としてスタートした児童厚生施設である。児童館には、児童厚生員という遊びの指導者が常駐しており、本研究では、この児童厚生員を広義の「プレイリーダー」として位置づけることとする。

ここで、空間計画分野における児童館を対象とした既往の研究を概観してみる。児童館の建設が盛んに進められた1970年代には、児童館の建設プロセス⁷⁾や建築計画上の問題点⁸⁾⁹⁾、学童保育所との併設問題¹⁰⁾などについて研究報告が行われ、その後の児童館の建築計画に示唆を与えるものとなっている。1980年代半ば以降の研究は、研究の視点が建築計画よりもむしろ児童館利用者の誘致圏¹¹⁾や児童の生活圏における児童館の認知度¹²⁾に関する都市計画的視点に移行し、児童館が都市施設として捉えられるようになる。このように、既往の研究は、児童館の運営側を対象になされたものが多く、児童側からみた、児童館の利用実態や児童厚生員（＝プレイリーダー）との関わり方について研究されているものはない。

そこで、本研究では、遊び環境が質的・量的に悪化

しているといわれる都市部に立地する児童館の、児童側からみた利用実態と、児童とプレイリーダーの関わり方の現状を明らかにするとともに、プレイリーダーが常駐する遊び場としての児童館が、今後、地域において、学校でも家でもない子どもたちの居場所となり、子どもたちがぶらりと寄ってみたいくなるような遊び拠点となるための課題について検討する。

2. 調査の概要

(1) 調査対象の概要

本研究の調査対象施設とした児童館は、全国に約4,500館設置されている。その設置基準や運営は各自治体に委ねられているため、地域により大きな差がみられる。そこで、本研究では、子どもの日常生活圏内に児童館が設置され、全国的にみても設置率の高い神戸市において調査を実施した。神戸市では、昭和41年の「神戸市児童福祉施設条例」の制定を機に中学校区に1児童館という設置目標を掲げ設置を進めている。平成10年度現在の設置数は、110館（総合児童センター1館、民間児童館4館を含む）で、中学校82校区中79校区において設置済みである。各児童館には、プレイリーダー（児童厚生員）をはじめ、館長、学童保育指導員等の職員が配されている^{*1}。

本研究では、既成市街地に立地する3児童館：「本庄児童館」「浜御影児童館」「六甲道児童館」を調査対象とした（以下、[本庄][浜御影][六甲道]と表記する）。各児童館の概要を表1に、平面図を図1に示す。なお、いずれの児童館にも専用の屋外遊び場は設置されていない。また、いずれの児童館も学童保育事業を実施している^{*2}。

(2) 調査方法

調査対象児童館では、自由に来館する一般来館児童（以下、[一般]と記述）と学童保育に在籍する児童（以下、[学保]と記述）が入り混じって遊んでいる。本調査では、一般来館児童（小学生のみ）と学童保育

*1 神戸市の児童館職員構成は概ね以下の通りである。常勤職員：館長1名（ほとんどの場合小・中学校の教頭・校長経験者）、児童厚生員1名（神戸市では、指導員と呼ぶ：保母あるいは教員資格が必要、調査時点において女性の指導員のみ）、パート職員：管理員1名、学童保育指導員1～3名（実施館のみ：89館/105館で実施、平成9年度）、体力増進指導員1名（実施館のみ：47館/105館で実施、平成9年度）。

*2 神戸市の学童保育所は、138カ所（児童館91、小学校14、民間33）設置されている（平成10年度現在）。

プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての児童館の利用実態

表 1. 調査対象児童館の概要

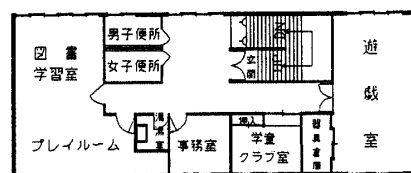
児童館名	[本庄]	[浜御影]	[六甲道]
開設年月日	S56.11.25	S54.4.28	S49.5.4
所在地	東灘区本庄町	東灘区御影本町	灘区深田町
地域の特徴	転出入者が比較的多い下町的要素の強い市街地	古くからの地域コミュニティが残る下町的要素の強い市街地	副都心としての整備が進行中のJR駅前再開発地区
小学校区*1 児童数、距離	東灘小学校 796名、300m	御影小学校 445名、420m	成徳小学校 587名、300m
延べ面積	301.73 m ²	298.56 m ²	328 m ²
建物 断面構成	2 児童館 1 地域福祉センター	2 児童館 保育所 1 児童館 保育所	5 勤労市民センター 4 児童館 勤労市民センター 3 スーパーマーケット 2 スーパーマーケット 1 専門店
職員	館長 1 指導員 1 管理員 1 学童保育指導員 2 体力増進指導員 1		
開館時間	9:30～17:00(12:15～13:00 昼休み)		
利用者数*2	38.2 人/日	47.9 人/日	45.5 人/日
低学年	27.0 人/日	40.7 人/日	32.7 人/日
高学年	8.3 人/日	6.3 人/日	9.2 人/日
[学保]数*3	18 人	26 人	22 人

- *1 小学校区は、児童館が所在する小学校、児童数は、その小学校の全児童数（児童数の資料出所：学校基本調査、平成 9 年 5 月 1 日現在）
距離は、児童館と小学校の地図上実測による直線距離を示す
- *2 利用者数は、中高生、幼児の利用も含む
（資料出所：神戸市保健福祉局児童家庭課、平成 9 年度平均）
- *3 [学保]数は、実質学童保育在籍者数を示し、学童保育登録者数と一致しない
（資料出所：各児童館調べ、平成 10 年 11 月現在）

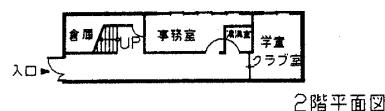
在籍児童の両者を対象に、調査員が調査票に基づいてインタビューをしながらアンケート調査を実施した（表 2）。調査期間は 1998 年 11 月、回収数は、[本庄] 60 票、[浜御影] 50 票、[六甲道] 63 票、合計 173 票であった。本調査を補足するために、各児童館の職員に、児童館の活動等についてヒアリングを行った。なお、児童らは、プレイリーダー（児童厚生員）に対して「先生」という呼称を使用しているため、本調査の質問では、「プレイリーダー」ではなく「先生」という用語を使用した。

(3) 調査対象児童の概要

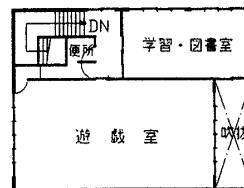
調査に回答した児童の基本属性を表 3 に示す。児童館別にみると、[一般] の低学年は [六甲道] が 49% と多く、[一般] の高学年は [本庄] (58%) が多い。[学保] は、[浜御影] (40%) が多い。性別は、低学年では女子 (67%) が多いが、高学年になると男子 (54%) が多くなる。母親が就労している割合は、([一般] のみ)、低学年が 57%、高学年が 75% である。住宅形式は、全体的に集合住宅 (74%) が多い。児童館と自宅間（以下〈児童館～自宅〉と表記）および小学校と自宅間（以下〈学校～自宅〉と表記）の平均距離は（[一般] のみを対象に地図上で実測）、低学年の〈児童館～自宅〉が最長である (437 m)。塾や習い事への参加状況は、全体の約 7 割が参加しており、なかでも、[一般] 低学年の参加率は 78% と高い。



〔本庄〕児童館

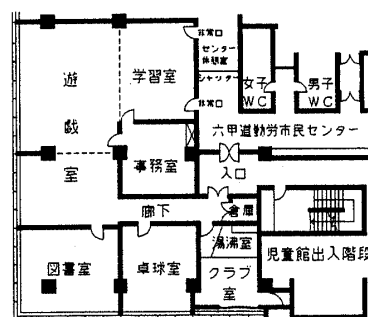


2階平面図



1階平面図

〔浜御影〕児童館



〔六甲道〕児童館

S=1:500



図 1. 調査対象児童館の平面図

表 2. 調査の概要

調査名	インタビュー併用質問紙調査
調査対象	[本庄][浜御影][六甲道]に来館した小学生
調査期間	1998 年 11/11(水)～12/4(金)
調査方法	来館児童に調査票を配布、児童による直接記入、調査員によるインタビューを併せて実施
回収数	[本 庄]: [一般] 44 票、[学保] 16 票、合計 60 票 [浜御影]: [一般] 25 票、[学保] 25 票、合計 50 票 [六甲道]: [一般] 42 票、[学保] 21 票、合計 63 票 全 体: [一般] 111 票、[学保] 62 票、合計 173 票

3. 結果および考察

(1) 一般来館児童の来館実態

児童館では、自分の意志で自由に来館する一般来館児童と学童保育に在籍する児童が入り混じって遊んでいる。そこで、まず、一般来館児童について、どのような児童が来館しているのかその実態を把握する。

表3. 回答児童の基本属性

	全体 N=173	〔一般〕 N=111				〔学保〕 N=62	
		低学年 N=63		高学年 N=48			
	%	人	%	人	%	人	%
児童館別							
〔本庄〕	34.7	60	25.4	16	58.3	28	25.8
〔浜御影〕	28.9	50	25.4	16	18.8	9	40.3
〔六甲道〕	36.4	63	49.2	31	22.9	11	33.9
性別							
男子	48.0	83	33.3	21	54.2	26	58.1
女子	52.0	90	66.7	42	45.8	22	41.9
家族類型							
核家族	84.4	146	84.1	53	83.3	40	85.5
世代家族	15.6	27	15.9	10	16.7	8	14.5
平均家族人数	4.4人 (1.2人)		4.7人 (1.2人)		4.6人 (1.2人)		4.1人 (1.1人)
平均きょうだい人数	2.3人 (0.9人)		2.4人 (1.0人)		2.4人 (0.9人)		2.0人 (0.7人)
母親就労有り：(一般のみ)	63.1	70	56.5	35	74.5	35	-
住宅形式							
1戸建て	26.0	45	25.4	16	39.6	19	16.1
集合住宅	74.0	128	74.6	47	60.4	29	83.9
平均距離*							
学校～自宅	366.4m (188.4 m)		372.4m (200.4 m)		358.8m (173.9 m)		-
児童館～自宅	412.6m (300.1 m)		437.3m (342.8 m)		381.8m (236.6 m)		-
塾・習い事							
回数/週 ²	2.1回 (1.2回)		2.2回 (1.2回)		2.3回 (1.3回)		1.7回 (1.0回)
(参加率)	69.4 N=120		77.8 N=49		68.8 N=33		61.3 N=38

(*)：標準偏差

*1：地図上実測による直線距離

*2：塾・習い事に通っていると答えた児童のみの一週間あたりの平均回数

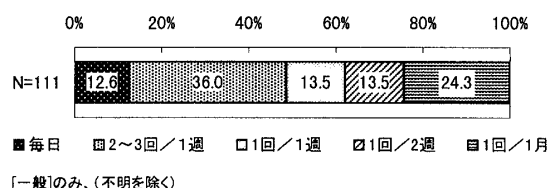


表4. 来館回数 (児童の属性別)

		多い		少ない		合計		検定
		%	人	%	人	%	人	
全体		48.6	54	51.4	57	100.0	111	
児童館別	本庄	43.2	19	56.8	25	100.0	44	
	浜御影	56.0	14	44.0	11	100.0	25	
	六甲道	50.0	21	50.0	21	100.0	42	
学年別	低学年	54.0	34	46.0	29	100.0	63	
	高学年	41.7	20	58.3	28	100.0	48	
性別	男	61.7	29	38.3	18	100.0	47	*
	女	39.1	25	60.9	39	100.0	64	
家族類型	核家族	48.4	45	51.6	48	100.0	93	
	世代家族	50.0	9	50.0	9	100.0	18	
母親の就労状況	就労あり	45.7	32	54.3	38	100.0	70	
	就労なし	51.3	20	48.7	19	100.0	39	
住宅形式	集合住宅	50.0	38	50.0	38	100.0	76	
	1戸建て	45.7	16	54.3	19	100.0	35	
平均距離	〈児童館～自宅〉	383m	49	443m	49	413m	98	
	〈学校～自宅〉	318m	49	415m	49	366m	98	*
	合計	701m	49	858m	49	780m	98	

〔一般〕のみ、(不明を除く)、*2検定(平均距離はt検定) *：P<0.05

1) 来館回数

児童館への来館回数は図2のとおりである。来館回数の多い順にみると、「ほとんど毎日」が13%、「1週間に2～3回」が36%であり、これらを合わせると、「1週間に2回以上」来館する児童は約半数(49%)に上る。一方、来館回数の少ない順にみると、「1カ月に1回」が24%、「2週間に1回」および「1週間に1回」がそれぞれ14%で、これらを合わせると「1週間に1回以下」は51%となる。以後の考察において、来館回数を分析の軸に用いる場合は、来館回数が「1週間に2回以上」を「多い」(49%)、「1週間に1

表5. 〈児童館～自宅〉と〈学校～自宅〉の距離関係(来館回数別)

全体		〈児童館～自宅〉の距離(m)					
		～200	201～300	301～400	401～500	501～	合計
距離(m)の	～200	6.1	3.0	4.0	8.1	1.0	22.2
	201～300	7.1	7.1	2.0	1.0	1.0	18.2
	301～400	5.1	1.0	4.0	1.0	7.1	18.2
	401～500	2.0	3.0	3.0	2.0	12.1	22.2
	501～	4.0	5.1	3.0	2.0	5.1	19.2
	合計	24.2	19.2	16.2	14.1	26.3	100.0

N=99, <不明を除く> :5%以上の回答があるセル

来館回数：多い		〈児童館～自宅〉の距離(m)					
		～200	201～300	301～400	401～500	501～	合計
距離(m)の	～200	6.1	6.1	6.1	14.3	0.0	32.7
	201～300	2.0	10.2	2.0	0.0	0.0	14.3
	301～400	6.1	0.0	6.1	2.0	8.2	22.4
	401～500	2.0	2.0	6.1	2.0	6.1	18.4
	501～	2.0	2.0	2.0	2.0	4.1	12.2
	合計	18.4	20.4	22.4	20.4	18.4	100.0

N=49, <不明を除く> :5%以上の回答があるセル

来館回数：少ない		〈児童館～自宅〉の距離(m)					
		～200	201～300	301～400	401～500	501～	合計
距離(m)の	～200	6.0	0.0	2.0	2.0	2.0	12.0
	201～300	12.0	4.0	2.0	2.0	2.0	22.0
	301～400	4.0	2.0	2.0	0.0	6.0	14.0
	401～500	2.0	4.0	0.0	2.0	18.0	26.0
	501～	6.0	8.0	4.0	2.0	6.0	26.0
	合計	30.0	18.0	10.0	8.0	34.0	100.0

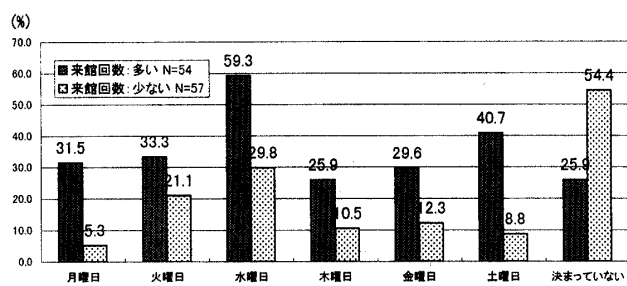
N=50, <不明を除く> :5%以上の回答があるセル

回以下」を「少ない」(51%)と分類して用いることとする。

つぎに、児童の属性別にみた来館回数を表4に示す。学年別をみると、低学年(「多い」54%、「少ない」46%以下、同様の順に記述)が高学年(42%、58%)よりも来館回数が若干多い。性別では、男子(62%、38%)が女子(39%、61%)よりも来館回数が多い。〈児童館～自宅〉の平均距離では、来館回数が多い児童ほど児童館に近い地域に居住していることがわかる(383m、443m)。また、〈学校～自宅〉の平均距離では、来館回数が多い児童ほど小学校に近い地域に居住していることがわかる(318m、415m：t検定により95%有意)。

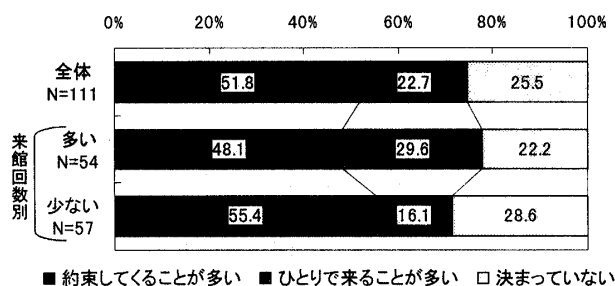
さらに、〈児童館～自宅〉の距離と〈学校～自宅〉の距離の関係を来館回数別に詳しくみる(表5)。来館回数が多いグループでは、学校と自宅の距離は

プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての児童館の利用実態



[一般]のみ、複数回答、(不明を除く)、χ²検定 *: $P<0.05$, **: $P<0.01$, ***: $P<0.001$

図3. 来館曜日 (来館回数別)



[一般]のみ、(不明を除く)

図4. 来館仲間 (来館回数別)

表6. 来館仲間 (児童の属性別)

		約束して		ひとりで		決まってい ない		合計		検定
		%	人	%	人	%	人	%	人	
全体		51.8	57	22.7	25	25.5	28	100.0	110	
児童館別	本庄	65.9	29	4.5	2	29.5	13	100.0	44	**
	浜御影	25.0	6	41.7	10	33.3	8	100.0	24	
	六甲道	52.4	22	31.0	13	16.7	7	100.0	42	
学年別	低学年	54.8	34	29.0	18	16.1	10	100.0	62	*
	高学年	47.9	23	14.6	7	37.5	18	100.0	48	
性別	男	38.3	18	25.5	12	36.2	17	100.0	47	*
	女	61.9	39	20.6	13	17.5	11	100.0	63	
家族類型	核家族	52.2	48	23.9	22	23.9	22	100.0	92	
	世代家族	50.0	9	16.7	3	33.3	6	100.0	18	
母親の 就労状況	就労あり	52.2	36	23.2	16	24.6	17	100.0	69	
	就労なし	51.3	20	23.1	9	25.6	10	100.0	39	
住宅形式	集合住宅	52.6	40	27.6	21	19.7	15	100.0	76	
	一戸建て	50.0	17	11.8	4	38.2	13	100.0	34	
平均距離	＜児童館～自宅＞	409m	53	530m	20	325m	25	413m	98	
	＜学校～自宅＞	347m	53	417m	19	350m	25	362m	97	
	合計	756m	53	956m	19	676m	25	775m	97	

[一般]のみ、(不明を除く)、χ²検定(平均距離はt検定) **: $P<0.01$ *: $P<0.05$

「200 m 以下」がもっとも多く (33%), 児童館と自宅の距離は「301～400 m」がもっとも多い (22%)。来館回数が多い児童は、小学校と自宅が近ければ、児童館と自宅が多少遠くても来館していることがわかる。その要因のひとつとして、後述するように、児童館への来館手段が関係していると考えられる。すなわち、〈学校～自宅〉はすべての児童が徒歩であり、その所要時間は距離に比例すると考えられるが、〈児童館～自宅〉は自転車を利用することにより所要時間が短縮できるため、学校と自宅が近いほど、より早く来館し、少しでも長く遊ぶことが可能となる。学校と自宅の距離関係は、来館回数の多少に影響を及ぼす一因となっているともいえる。

2) 来館曜日

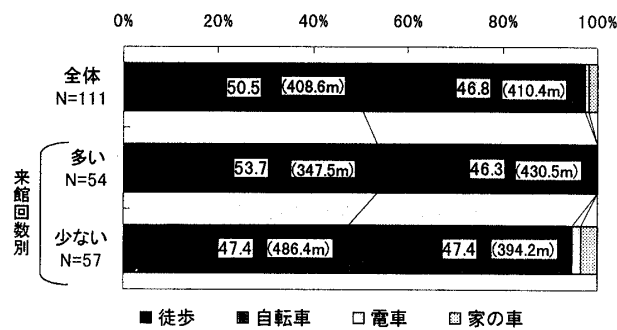
児童館は月曜日から土曜日まで開館しているが、どの曜日によく来館するのかを質問したところ、学校の終業が早い水曜日がもっとも多い結果となった (図3)。同じく学校の終業の早い土曜日をみると、来館回数が少ない児童の土曜日来館 (9%) が、水曜日来館 (30%) と比べるとかなり少ないことがわかる。この

理由として、これらの児童の土曜日の過ごし方が、塾や習い事、スポーツクラブに行ったり、家族と一緒に過ごすことが多いことも一因として考えられる。また、来館回数が少ない児童の半数以上は、来館曜日が「決まっていない」(54%) と答えている。

3) 来館仲間

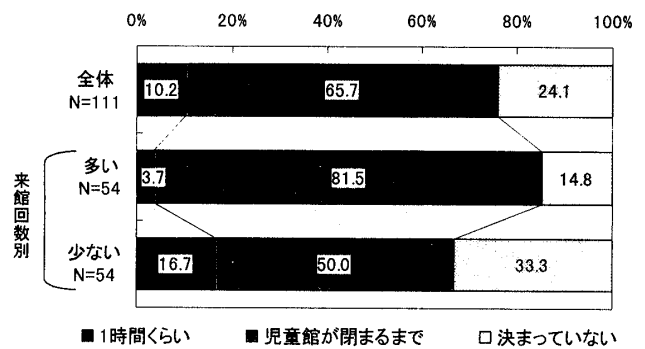
最近の子どもの遊びの特徴として「友だちと約束しないと遊べない」ということがしばしば取り上げられている。そこで、児童館へは、友だちと約束をして来館しているのかどうかを質問した (表6)。全体をみると、「約束して」(52%) が半数を超え、残りは「ひとりで」(23%)、「決まっていない」(26%) と二分しており、約束をしないで来館する児童が一定割合いることがわかる。児童館にはプレイリーダーが常駐して常時遊び環境を整えているため、たとえひとりで来館しても、ひとりで遊ぶこともできれば、すでに来館している児童と一緒に遊んだり、あるいはプレイリーダーを相手に遊ぶこともできる。そのため、一部の児童は、児童館を、友だちとの約束なしに来館しても、様々な遊びができる場所として認識しているといえる。

児童の属性別にみると、学年別では、低学年も高学年のいずれも「約束して」(低学年: 55%, 高学年: 48%) がもっとも多い。「ひとりで」は、低学年 (29%) が高学年 (15%) より多く、「決まっていない」は、高学年 (38%) が低学年 (16%) より多く、高学年ほど約束の有無は流動的であることがわかる。性別では、「約束して」は女子 (62%) が、男子 (38%) よりも多い。これは、女子の場合、安全のためにひとりで遊びに行くこと自体を親に規制されている児童が多いことも一因と考えられる。〈児童館～自宅〉の平均距離は、「ひとりで」(531 m) が「約束して」(409 m) よりも長い。また、〈小学校～自宅〉と合計のいずれの平均距離も「ひとりで」が「約束して」や「決まっていない」に比べて長い。ひとりで来館する児童



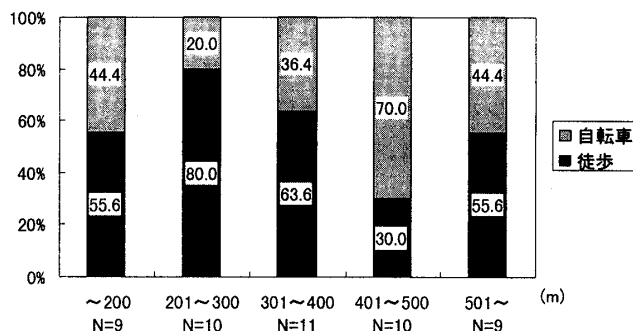
[一般]のみ、(不明を除く)、()内の数値は「児童館～自宅」の平均距離を示す

図5. 来館手段 (来館回数別)



[一般]のみ、(不明を除く)、 χ^2 検定 $P<0.01$

図7. 滞留時間 (来館回数別)



N=49、(不明を除く)

図6. 「児童館～自宅」の距離別来館手段 (来館回数：多い)

は、児童館で遊ぶために、多少遠くても来館していることがわかる。

次に来館回数別にみると (図4)、来館回数が多いグループでは「ひとりで」が30%であるのに対し、少ないグループでは16%である。来館回数が多い児童ほど友だちとの約束なしに、ひとりで気軽に来館していることがわかる。

4) 来館手段

児童館への来館手段は、「徒歩」と「自転車」が相半ばし、大人による送迎 (「家の車」) はほとんどない (図5)。来館回数別にみても来館手段にほとんど差はみられない。つぎに、「児童館～自宅」の平均距離をみると、全体では、「徒歩」が409 m、「自転車」410 mで差はみられないが、来館回数別では、来館回数が多いグループの「自転車」が431 mであるのに対し、「徒歩」は348 mで、自転車のほうが遠方から来館している。この傾向は来館回数が少ないグループにはみられない。さらに、来館回数が多い児童のみを対象に、来館手段と「児童館～自宅」の距離の関係をみると (図6)、自宅から児童館が遠いと自転車の利用が多くなる傾向が認められ、頻繁な来館には、自転車

が役立っているといえる。その一方で、自転車を持っていない児童や親から自転車の利用を制限されている児童は、必然的に徒歩で来館するため、自宅から児童館が遠いと頻繁に来館することが難しくなるといえる。

5) 滞留時間

児童館に来館した児童が滞留している時間をみると (図7)、来館回数が多いグループは「児童館が閉まるまで」(82%) が圧倒的に多く、放課後の大半の時間を児童館で過ごしていることがわかる。来館回数が少ないグループも、「児童館が閉まるまで」(50%) がもっとも多いが、「決まっていない」(33%) という回答も比較的多くみられる。インタビューによると、来館回数が少ない児童のなかには、公園や校庭、友だちの家など、放課後遊びに立ち寄る場所が複数あり、児童館もそのうちのひとつとして位置づけている児童もみられた。すなわち、これらの児童の児童館利用方法は、来館回数の多い常連児童と異なり、放課後の遊びの流れや遊び時間、遊び相手により、あるいは塾・習い事までの合間に、ぶらりと児童館に立ち寄り、好きな時間を過ごして、次の場所へ移動するという方法をとることが多いため、滞留時間も「決まっていない」が多くみられると考えられる。

(2) 一般来館児童の放課後の遊び実態

一般来館の児童に、放課後どのようにして遊んでいるのかを尋ねた。

1) 放課後の遊び相手

放課後の遊び相手は、来館回数に関係なく「同学年の友だち」(「多い」: 83%, 「少ない」: 84%, 以後この順に記述) が最多である (図8)。異年齢の友だちをみると、来館回数が多い児童ほど、異年齢の友だちとの遊びが多くみられる。「年上の友だち」(32%, 16%), 「年下の友だち」(23%, 9%)。これは、児童館

プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての児童館の利用実態

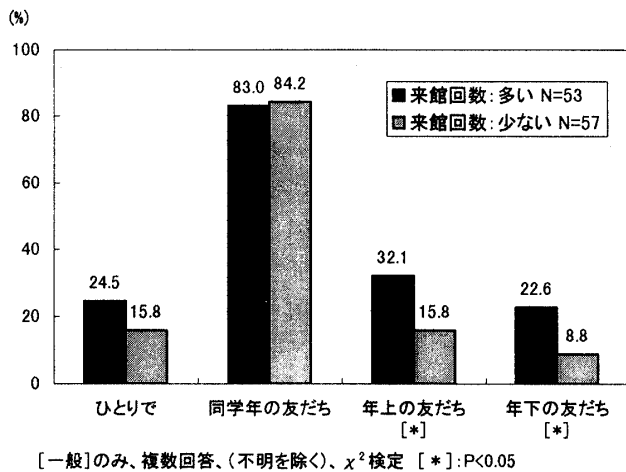


図8. 放課後の遊び相手(来館回数別)

では異年齢で遊ぶ機会も多いため、頻繁に遊びに行けば、必然的に異年齢の児童と接する機会が増えることが一因として考えられる。

2) 放課後の遊び場所

放課後よく遊ぶ場所と、そのなかで一番よく遊ぶ場所を尋ねた(図9)。全体をみると、私的空間では「友だちの家」(71%)「自分の家」(64%)、公的空間では「近所の公園」(64%)「児童館」(64%)で遊ぶ児童が多い。自宅周辺の「団地・マンションの周り」(30%)、「近所の道路」(16%)、「駐車場」(16%)では、「交通量が多く危険である」「遊びが禁止されている」等の理由からあまり遊ばれていない。来館回数別にみると、来館回数が多い児童は「児童館」(81%)がもっとも多く、「近所の公園」(70%)と続いている。この順序は一番よく遊ぶ場所と一致し、このグループは「自分の家」以外で遊ぶことを好んでいるといえる。来館回数が少ない児童は「友だちの家」(79%)や「自分の家」(79%)といった私的室内空間が多く、次いで「近所の公園」(59%)となっている。一番よく遊ぶ場所は、「友だちの家」がもっとも多く、「自分の家」「近所の公園」と続き、「児童館」はごく少数である。

(3) 来館理由

一般来館の児童はなぜ児童館に遊びに来ているのか、何を求めて遊びに来ているのかについて尋ねた(表7)。全体では「1. 友だちと遊べるから」(69%)がもっとも多い。近年、子ども同士の間関係が希薄になってきていると指摘されているが、児童館に来館する児童は仲間との遊びを求めていることがわかる。続いて、「雨の日でも遊べるから」(57%)、「楽しい行

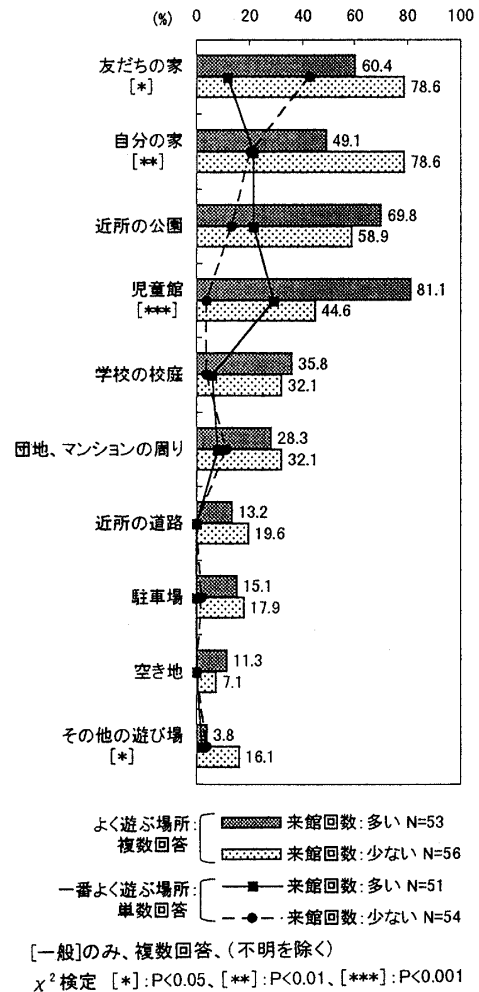


図9. 放課後の遊び場所(来館回数別)

事があるから」(47%)という児童館の魅力に関する理由が上位を占める。また、「家にいてもつまらないから」(47%)、「ひまだから」(47%)という個人的な理由も上位にみられる。つぎに、来館理由と児童の属性、来館実態との関連をみる。まず、児童の属性との関連についてみると、「2. 雨の日でも遊べるから」では、児童館と自宅の距離および学校と自宅の距離に有意差がみられ、この項目を理由として挙げる児童は各々の距離いずれも短い。「8. 走り回れるから」という理由では、各児童館の遊戯室の広さ・形態が大きく反映されており3児童館の間に有意差がみられる。「12. なんとなく」は、学年・母親の就労状況・住宅形式に有意差がみられ、高学年、母親の就労あり、集合住宅居住者がこの項目を理由として挙げている。来館理由と来館実態の項目との関連についてみると、来館回数と来館仲間に有意差が多くみられる。

そこで、来館回数別と来館仲間別に来館理由を図10に示す。来館回数の多少で比較すると、児童館の

表 7. 来館理由と児童の属性・来館実態との関連 (検定結果)

		全体		属性								来館実態						
		(%)	(人) N=109	児童館	学年	性別	家族類型	母親就労状況	住宅形式	兄弟人数*	児童館↕自宅の距離*	学校↕自宅の距離*	遊び事 の回数/週*	来館回数	来館仲間	来館手段	滞在時間	
来館理由	児童館の魅力による理由	1. 友だちと遊べるから	69.4	75														
	2. 雨の日でも遊べるから	56.5	61								○	○		◎				
	3. 楽しい行事があるから	47.2	51			○											○	
	4. 広いから	33.3	36											◎			○	
	5. おもちゃがたくさんあるから	28.7	31														○	
	6. 無料だから	28.7	31											○	○			
	7. マンガがあるから	25.9	28												○			
	8. 走り回れるから	19.4	21	◎														
	9. 先生がいるから	7.4	8											◎	◎			
	個人的理由	10. 家にいてもつまらないから	47.2	51	○											○		
		11. ひまだから	47.2	51							○							
		12. なんとなく	42.6	46		◎			○	○								
		13. 家から近いから	30.6	33								○						
		14. 家に誰もいないから	22.2	24	○	○										○		
		15. 小さいときから来ているから	15.7	17									◎					
		16. 親が行っておいでと言うから	13.0	14	○							○				◎		
		17. きょうだいが来ているから	7.4	8														
		18. その他	6.4	7														

[一般]のみ、複数回答、(不明を除く)、 χ^2 検定による結果を示す ○: $P<0.05$, ◎: $P<0.01$ *: 検定による結果を示す ○: $P<0.05$, ◎: $P<0.01$

魅力の項目「2. 雨の日でも遊べるから」「4. 広いから」「9. 先生がいるから」において、来館回数が多い児童の回答が目立つ。来館仲間別にみると、ひとりで来館することが多い児童は、児童館の魅力の項目では、「6. 無料だから」「7. マンガがあるから」「9. 先生がいるから」を多く挙げており、個人的な理由の項目では、「10. 家にいてもつまらないから」「14. 家にだれもいないから」「16. 親が行っておいでというから」を多く回答している。このことから、ひとりで来館する児童の多くは、児童館を、誰かと何かして遊ぶことができ、放課後のもてあまし気味の時間を過ごせる居場所として捉えているといえる。

(4) 児童館における遊び実態

1) 遊び内容

児童館の遊びは、「相手が必要な静的遊び」「相手が必要な動的遊び」「一人でできる静的遊び」「一人でできる動的遊び」に4分類できる。そこで、児童館でよくする遊びについて質問した(表8)。

全体的にみると、児童館では遊び相手を比較的容易に得やすいため、「相手が必要な遊び」(卓球・おにごっこ、友人とおしゃべり・ボードゲーム等)の回答が多い。「相手が必要な動的遊び」のなかでは、「卓球」の人气が非常に高い。「相手が必要な静的遊び」では、「友だちとおしゃべり」がもっとも多い。一方、「一人でできる静的遊び」のなかで、家庭でもできると考えられる「ドミノ」「パズル」の回答も比較的多くみ

られる。その理由として、児童館での遊びは家庭と異なった楽しみ方があることが考えられる。例えばドミノやパズルの場合、作る過程では一人であっても、できあがった作品をプレイリーダーや多くの友だちに見せることができ、達成感が得られる遊びとなっている。

来館種別にみると、[学保]は児童館で過ごす時間が長いため、多種多様な遊びを回答しており、[一般]に比べると「一人でできる遊び」の回答も多い。[一般]を来館仲間別にみると、友だちと約束して来館する児童は「卓球」(60%)、「友だちとおしゃべり」(56%)といった相手が必要な遊びが多いが、ひとりで来館する児童は「ボードゲーム」(56%)、「ぬりえ」「本を読む」「マンガを読む」(各44%)をして遊んでおり、一人でできる遊びの回答も多い。

2) 遊び相手

児童館内での遊び相手は、全体的には放課後の遊び相手と同様に「同学年」が多い(表9)。来館種別では、[学保]は「年上」(37%)や「年下」(40%)の異年齢の回答が[一般]に比べると多い。[一般]を来館回数別にみると、来館回数が多い児童は「年上」(21%)や「年下」(19%)といった異年齢の回答が、来館回数が少ない児童(それぞれ11%, 7%)よりも多く、来館回数が多い児童に、異年齢との「交遊」がより多くみられるといえる。来館仲間別にみると、友だちと約束して来館する児童は、遊び相手が「同学年」(95%)に集中しているが、ひとりで来館する児童は「同学年」(60%)が多いものの、「ひとりで」(56%)や「先生」(28%)に分散している。ひとりで来館する児童へのインタビューによると、「児童館にはひとりで遊びに来るけれど、遊び相手が見つければ一緒に遊ぶ。見つからなくても、本を読んだり、マンガを読んだり、先生と遊んだりする」という遊び方が回答された。また、児童館では、集団遊び(たとえば室内野球)をするときに人数が足りなければ、知らない子や年下の子に声をかけて参加を呼びかけるため、異年齢による集団遊びが成立しやすいことも明らかになった。

3) 行事参加

1年間を通して様々な行事を実施していることが、児童館活動の特徴のひとつである。いずれの児童館でもプレイリーダーが中心となり、2大行事の「クリスマス会」「夏祭り」をはじめとして、「映画」「紙芝居」「体育大会」「手芸」「料理」等の様々な行事が各館で工夫を凝らされ実施されている。そこで、[一般]を対象に([学保]は原則的に参加)行事への参加頻度

プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての児童館の利用実態

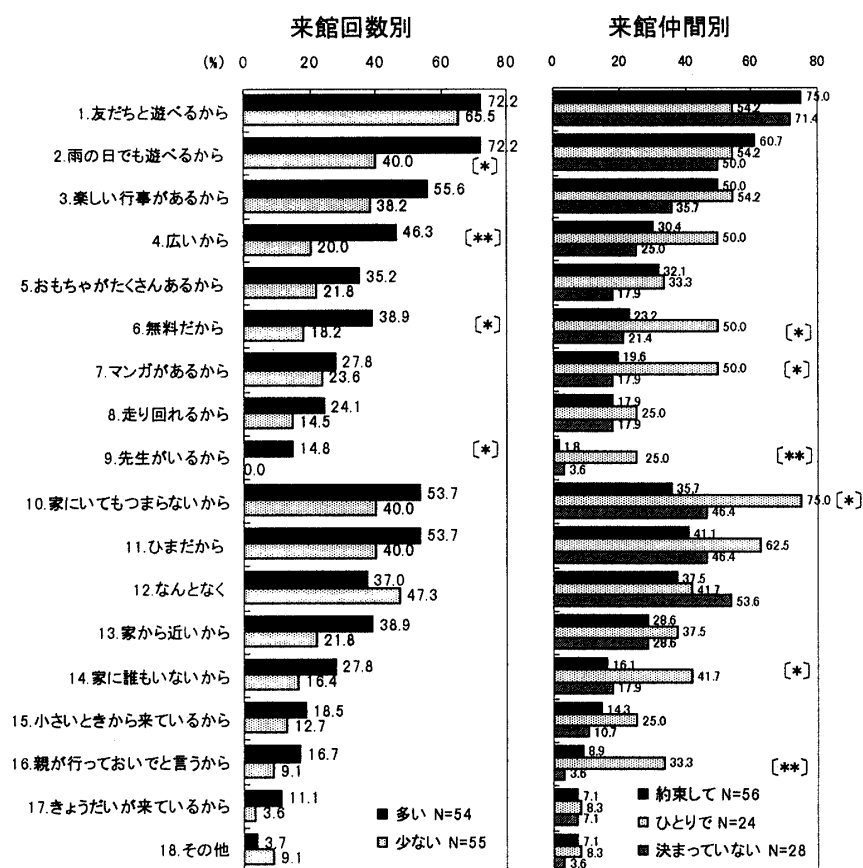
[一般]のみ、複数回答、(不明を除く)、 χ^2 検定 *: $P<0.05$ **: $P<0.01$

図 10. 来館理由 (来館回数別・来館仲間別)

表 8. 児童館における遊び内容

	来館種別								単位: %
	[一般]							[学保]	
	[一般] 全体	来館回数別			来館仲間別				
		多い	少ない	χ^2 検定	約束して	ひとりで	決まってい ない		χ^2 検定
	N=108	N=54	N=54		N=55	N=25	N=28	N=62	
○ めいえ	35.2	37.0	33.3		36.4	44.0	25.0	74.2	
○ ドミノ	38.9	40.7	37.0		38.2	40.0	39.3	84.5	
○ 本	33.3	40.7	25.9		27.3	44.0	35.7	71.0	
○ パズル	36.1	44.4	27.8		38.2	36.0	32.1	82.9	
○ マンガを読む	37.0	40.7	33.3		32.7	44.0	39.3	53.2	
○ 絵を描く	30.6	33.3	27.8		36.4	32.0	17.9	81.3	
● 友だちとおしゃべり	47.2	53.7	40.7		56.4	36.0	39.3	66.1	
● ボードゲーム	32.4	40.7	24.1		23.6	56.0	28.6	* 56.5	
● ままごと	18.5	18.5	18.5		23.6	20.0	7.1	32.3	
● 先生とおしゃべり	10.2	11.1	9.3		5.5	16.0	14.3	32.3	
◇ けんだま	32.4	40.7	24.1		27.3	36.0	39.3	50.0	
◇ トランポリン	23.1	31.5	14.8	*	30.9	16.0	14.3	58.1	
◇ なわとび	16.7	22.2	11.1		16.4	28.0	7.1	56.5	
◇ こま	24.1	31.5	16.7		20.0	32.0	25.0	35.5	
◇ ヨーヨー	18.5	22.2	14.8		18.2	16.0	21.4	32.3	
◇ 体操	12.0	18.5	5.6	*	10.9	12.0	14.3	24.2	
◇ 一輪車	9.3	9.3	9.3		12.7	4.0	7.1	19.4	
◇ ミニ4駆	9.3	9.3	9.3		7.3	12.0	10.7	16.1	
◇ 竹馬	8.3	9.3	7.4		7.3	12.0	7.1	16.1	
◆ 卓球	51.9	57.4	46.3		60.0	40.0	46.4	45.2	
◆ おにごっこ	32.4	37.0	27.8		29.1	36.0	35.7	66.1	

複数回答、(不明を除く)、 χ^2 検定、*: $p<0.05$ 、白抜き数字は回答が多い上位3種類を示す
 ○: 一人でできる静的遊び ●: 相手が必要な静的遊び
 ◇: 一人でできる動的遊び ◆: 相手が必要な動的遊び

表 9. 児童館における遊び相手

来館種別										単位: %
	[一般]								[学保]	
	来館回数別			来館仲間別						
	全体	多い	少ない	χ^2 検定	約束して	ひとりで	決まってい ない	χ^2 検定		
	N=108	N=53	N=55		N=56	N=25	N=27			N=62
ひとりで	21.3	22.6	20.0		12.5	56.0	7.4	***	25.3	
同学年の友だち	84.3	88.7	80.0		94.6	60.0	85.2	***	90.3	
年上の友だち	15.7	20.8	10.9		12.5	20.0	18.5		37.1	
年下の友だち	13.0	18.9	7.3		10.7	20.0	11.1		40.3	
先生	8.3	9.4	7.3		1.8	28.0	3.7	***	22.6	
複数回答、(不明を除く)、 χ^2 検定、***: p<0.001										

複数回答、(不明を除く)、 χ^2 検定、***: $p<0.001$

表 10. 行事への参加頻度

単位: %								
	[一般]	来館回数別			来館仲間別			
	全体	多い	少ない	χ^2 検定	約束して	ひとりで	決まってい	χ^2 検定
	N=107	N=53	N=54		N=54	N=25	N=28	
よく参加する	16.8	17.0	16.7		16.7	24.0	10.7	
時々参加する	40.2	50.9	29.6		40.7	52.0	28.6	
ほとんど参加しない	43.0	32.1	53.7		42.6	24.0	60.7	

[一般]のみ、(不明を除く)

来館回数別・来館仲間別のいずれも χ^2 検定による有意差なし

を質問した(表10)。全体では、「ほとんど参加しない」(43%)が多く、行事への関心は概して低いとい

える。来館回数別にみると、「よく参加する」割合は、来館回数の多少による差異がほとんどない。これは、

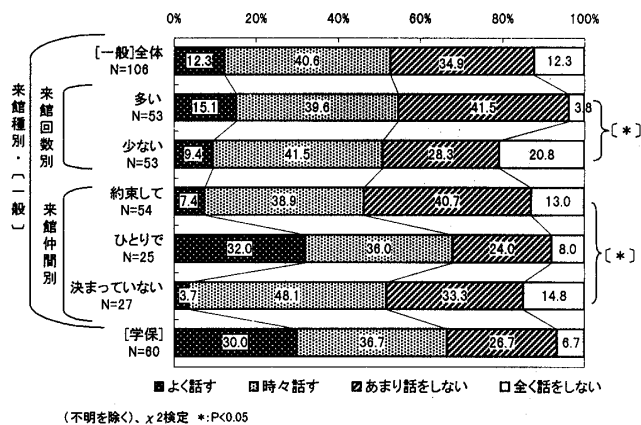


図 11. プレイリーダー（先生）との会話頻度

好みの行事のときだけ来館する児童が一定割合いるためと考えられる。「時々参加する」は来館回数の多いグループの回答が多い。「ほとんど参加しない」は、来館回数が少ないグループのほうが多い。この要因のひとつとして、児童館側の広報活動が不十分なことが考えられる。いずれの児童館も、行事の広報活動を積極的にしておらず、児童らは行事予定を児童館で配布される「児童館便り」でしか把握できない。そのため、来館回数が少ない児童ほど、行事予定を知る機会が少なくなる。

各児童館のプレイリーダーの得意分野を生かしたオリジナル行事のなかには、非常に人気の高いものがある。たとえば、[六甲道]の「ビーズ手芸：毎月1回」や「マフラー編み（リリヤンを毛糸に応用したもの）：冬季に継続的に実施」のような家庭ではなかなかできない創作的な行事は、子どもにモノを「つくる」ことの楽しさや、完成したときの達成感を与えることのできる点で評価でき、男女問わず非常に人気があった。プレイリーダーの存在により成立する「行事」は、児童館固有の魅力である。より多くの児童の参加を促し、新たな遊びのきっかけを与えるためには、プレイリーダーの力量が非常に重要である。

(5) 児童とプレイリーダーとの関わり方の実態

1) 会話頻度

本調査対象児童館には、プレイリーダー＝遊びを指導する児童厚生員（児童は「先生」と呼んでいる）が常駐している。児童とプレイリーダーとの関わり方を、会話頻度を通してみていくことにする（図 11）。

来館種別にみると、[学保]は毎日来館し、滞留時間も長いので[一般]よりも会話頻度が多い。[一般]を来館回数別にみると、「よく話す」と「時々話す」

表 11. 児童館にいて欲しいプレイリーダー（先生）像

来館種別											単位: %
[一般]										[学保]	
[一般] 全体 N=108	来館回数別			x ² 検定	来館仲間別			x ² 検定			
	多い	少ない			約束して	ひとりで	決まってい ない				
	N=53	N=55			N=55	N=25	N=28		N=61		
面白い先生	75.9	69.8	81.8		72.7	64.0	92.9	*	60.7		
優しい先生	69.4	71.7	67.3		69.1	84.0	57.1		68.9		
知らない遊びを 教えてくれる先生	53.7	49.1	58.2		52.7	64.0	46.4		65.6		
一緒に遊んでくれる先生	45.4	45.3	45.5		41.8	60.0	39.3		50.8		
話を聞いてくれる先生	39.8	39.6	40.0		41.8	44.0	32.1		47.5		
勉強をみてる先生	20.4	17.0	23.6		20.0	36.0	7.1	*	47.5		
年上の友だちのような先生	27.8	32.1	23.6		23.6	44.0	21.4		31.1		

複数回答、(不明を除く)、x²検定、*p<0.05

複数回答、(不明を除く)、x2検定、*p<0.05

の「話す」派は、来館回数が多い児童で53%、少ない児童が51%とほとんど差はみられず、いずれも約半数である。しかし、「話さない」派（あまり話さない＋全く話をしない）の「全く話をしない」をみると、来館回数が多い児童は4%であるのに対し、少ない児童は21%に上り、プレイリーダーとの関わりなしに児童館を利用していることがわかる。また、来館仲間別にみると、「話す」派は、「約束して」が46%、「決まっていない」が52%であるのに対し、「ひとりで」は68%と高く、その内訳の「よく話す」が32%と高率であり、プレイリーダーとの関わりの強さがわかる。

プレイリーダーとよく話をする児童に、会話の内容を尋ねると（インタビューによる）、「いろんな話をいっぱいする」「学校や家の話をする」「今日あったことを話す」という日常的な出来事に関する会話を、児童から積極的に話しに行くケースが多かった。逆に、あまり話をしない児童にその理由を尋ねると、「先生とは知り合いではない」「先生の名前も知らないから話さない」「あいさつだけ」という回答が目立った。

2) 児童館にいて欲しいプレイリーダー像

次に、児童館にどのような先生（プレイリーダー）がいて欲しいかを尋ねた（表 11）。「面白い先生」「優しい先生」という回答が多く、「知らない遊びを教えてくれる先生」と続いている。来館仲間別にみると、「ひとりで」は、「約束して」や「決まっていない」グループと比べると、「知らない遊びを教えてくれる先生」（64%）「一緒に遊んでくれる先生」（60%）「年上の友だちのような先生」（44%）の回答が多く、遊び相手になってくれるプレイリーダーを求めていることがわかる。また、児童館のプレイリーダーは、学校の先生とは異なる存在として受け止められていた。具体的には、学校の先生が「厳しい、怒る、こわい」という印象であるのに対し、児童館のプレイリーダーは「あまり怒らず、優しい」という意見が多かった。

プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての児童館の利用実態

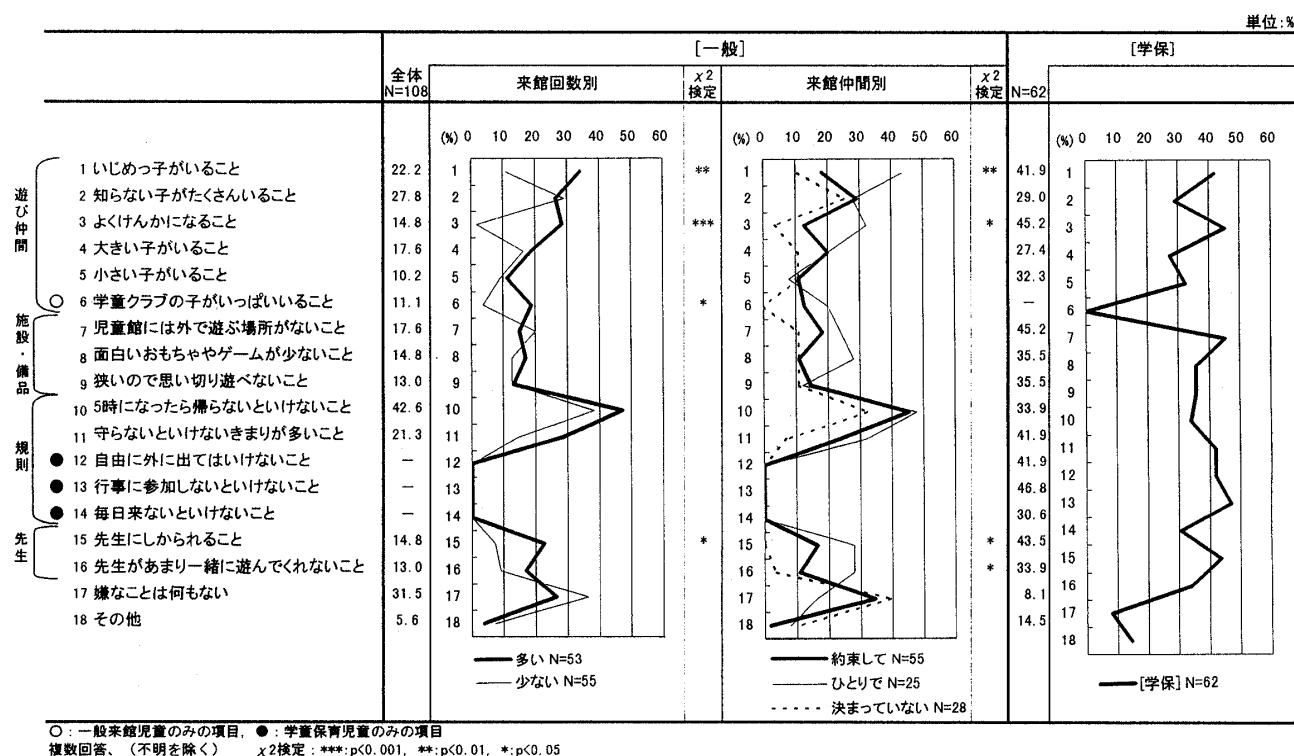


図 12. 児童館に対する不満の内容

(6) 児童館に対する評価

1) 児童館に対する不満の内容

児童館で嫌だと感じることを尋ねた(図 12)。来館種別みると、[一般]は「10. 5時になったら帰らないといけないこと」(43%)が最多で、「17. 嫌なことは何もない」(32%)と続いている。児童館の閉館時刻は5時であるが、これは児童館の運営方針上「5時にはすべての児童が館外に出た状態」が想定されているので、遊具の片付け等に要する時間を考えると実質的に遊べる時間はより短い。館によっては4時30分頃に遊びを終了させるところもある。小学校で隔週週休2日制が実施されて以来、平日に5校時や6校時まで授業のある日が増えたため、児童館へ来館する時刻は遅くなり、児童館で遊べる時間も短くなっている。せっかく楽しい遊びをしていても閉館のために終了せざるを得ず、時間的に思う存分遊べていないことが指摘できる。[学保]は[一般]に比べると各項目で不満が多い(「13. 行事に参加しないとけないこと」(47%)「3. よくけんかになること」(45%)「7. 児童館には外で遊ぶ場所がないこと」(45%)など)。[学保]は放課後の大半を、児童館で管理されながら過ごさねばならないため、遊びに自由度が少ないことが不満の多い要因と考えられる。

不満の内容を項目別にみると、遊び仲間(1~6)では、「1. いじめっ子がいること」「2. 知らない子がたくさんいること」「3. よくけんかになること」の回答が多い。遊び仲間に関しては、少子化が進行し、日常の遊びのなかで子ども同士が群れて遊ぶことが減少している現状を考えると、児童館は知らない子と友だちになることができる場所であり、プレイリーダーらの導き方によってはこのような児童の不満を解消することも可能であると考えられる。

施設・備品(7~9)では、調査対象児童館が屋内型であるため「7. 児童館には外で遊ぶ場所がないこと」に対して不満が相当数あると予想したが、[一般]のこの項目に対する不満は少数である。彼らの多くは、児童館を屋内型の遊び場として認識しており、外遊びがしたいときは公園等に行けばよいと考えている。しかし、自由に屋外に遊びに行くことのできない[学保]には、不満が多い。同様に「9. 狭いので思い切り遊べないこと」も、[学保](36%)は不満が多い。

先生(15, 16)の項目では、「15. 先生にしかられること」で、[学保](44%)が[一般](15%)よりも多い。これは、[学保]のほうが先生との関わりが多いことに起因すると考えられる。[一般]の場合も、来館回数が少ないと、先生との関わりも少なくなるた

表 12. 児童館の楽しさ・大切さ・日曜来館の希望

来館種別											単位: %
	[一般]									[学保]	
	[一般] 全体	来館回数別			来館仲間別						
		多い	少ない	x2 検定	約束して	ひとりで	決まってい ない	x2 検定			
◆児童館の楽しさ	N=108	N=54	N=54		N=55	N=25	N=28		N=62		
楽しい	73.1	81.5	64.8		80.0	60.0	71.4		61.3		
普通	25.0	18.5	31.5		18.2	36.0	28.0		29.0		
楽しくない	1.9	0.0	3.7		1.8	4.0	0.0		9.7		
◆児童館の大切さ	N=108	N=52	N=56	*	N=56	N=24	N=28		N=61		
とても大切だ	29.6	42.3	17.9		35.7	41.7	7.1		29.5		
あった方がよい	43.5	36.5	50.0		42.9	37.5	50.0		34.4		
なくてもよい	5.6	5.8	5.4		5.4	4.2	7.1		14.8		
わからない	21.3	15.4	26.8		16.1	16.7	35.7		21.3		
◆日曜来館の希望	N=109	N=52	N=57		N=56	N=24	N=28		N=61		
遊びに来る	40.4	50.0	31.6		37.5	58.3	28.6		24.6		
遊びに来ない	14.7	15.4	14.0		12.5	20.8	14.3		39.3		
わからない	45.6	34.6	54.4		50.0	20.8	57.1		36.1		

(不明を除く)、x2検定 *: P<0.05

め(前述), しかられることも少なくなるといえる。「16. 先生がいっしょに遊んでくれないこと」の項目では, [一般] の「ひとり」で来館する児童(28%)は, 「約束して」(11%)や「決まっていない」(4%)児童に比べて多く不満を示している。ひとりで来館する児童の多くは, もっと先生と一緒に遊んで欲しいと思っていることがわかる。

児童へのインタビューによると, 「ほかの子の声がうるさい」という不満を示す意見が多くあげられた。これは, 走り回る児童が多いなかで読書, ぬりえ, お絵かきや宿題をせざるを得ないことへの不満といえる。特に[浜御影]は静かな遊びの空間と走り回る空間が分離できておらず, 静かに遊びたい児童と走り回りたいたい児童の間で, しばしばけんかがみられた。児童館には, 静かな遊びに対応する空間を用意することが重要である。また, [浜御影]は保育所と合築のため, 乳幼児が昼寝中はその上階にある児童館の遊戯室では走り回る遊びが制限されており, このような遊びの制限に対する不満も聞かれた。さらに, [六甲道]の場合, ビルの4階に位置するため, 天井高が低く, 下階への配慮等から子どもの遊びが制限されており(ボール遊びの禁止, 紙飛行機禁止等), ここでも施設側の要因による遊び制限に対して不満が示された。

2) 児童館の楽しさ

児童館で遊ぶことが楽しいかどうかを質問した(表12)。全体的に「楽しい」(73%)が多い。特に, [一般]の来館回数が多い児童は, 「楽しい」が82%と非常に多く, 「楽しくない」はみられない。[学保]も「楽しい」が61%と多いが, 「楽しくない」という回答も10%みられる。自分の意志で自由に来館する[一般]と, 放課後必ず来館せねばならない[学保]

では, 児童館で遊ぶことに対する意識が異なることがわかる。

3) 児童館の存在の大切さ

児童館の存在がどのくらい大切なかを質問した(表12)。「とても大切だ」が多いのは, [一般]の来館回数が多い児童と(42%), ひとりで来館する児童である(42%)。これらの児童にとって, 児童館は重要な遊び場であると認識されていることがわかる。[学保]は, 「とても大切だ」が29%を占める一方で, 「なくてもよい」が15%と[一般](6%)に比べると多い。

4) 日曜来館の希望

もし, 日曜日(休日)も児童館が開いていたら遊びに来るかどうかを尋ねた(表12)。「遊びに来る」と答えた児童が多いのは, 来館回数が多い児童(50%)と, ひとりで来館する児童(58%)である。これは, 前述の「児童館の存在の大切さ」の結果とも一致し, 児童館の存在を重要だと答えた児童ほど日曜日の開館を望んでいることがわかる。[学保]は「遊びに来ない」(39%)が最も多い。

今回調査を実施した児童館では, 土曜日は開館しているが, 日曜日・祝日は原則的に閉館である。しかし, 児童館を地域の遊び拠点として活性化させようとする大人からは, 児童館は子どもの遊び場であるから日曜日も開館するべきであるという意見もある。また, 親が日曜日は休日でない家庭や, 変則的な勤務の家庭では, 休日の児童館開館を希望する声も少なくない。児童館の開館曜日は, 今後, 検討が必要と思われる。

4. ま と め

(1) 結果の要約

本研究は, 児童館をプレイリーダーの常駐する地域の遊び場として捉え, 神戸市の都市部に立地する3児童館において, 来館児童を対象に実施した利用実態調査の結果について分析した。結果は以下のように要約される。

① 一般来館児童の来館実態をまとめる。来館回数は「ほとんど毎日」や「1週間に2~3回」という常連的な利用をする児童が約半数を占め, 特に, 低学年, 男子に多くみられた。また, 自宅と児童館, 自宅と小学校の各距離関係が来館回数に影響を及ぼしていることが明らかになり, 各距離が短いほど来館回数が多い傾向が認められた。来館仲間は, 友だちと約束して来館する児童が全体の約半数を占める一方で, 友だちと

プレイリーダーの常駐する地域の遊び場としての児童館の利用実態

約束せずにひとりで来館する児童も一定割合存在していた。来館手段は、徒歩と自転車の利用が約半数ずつで、自転車は遠方からの利用を促す重要な手段であることがわかった。児童館での滞留時間は、閉館まで遊ぶケースがもっとも多かった。

② 一般来館児童の放課後の遊び状況の結果は、遊び相手をみると、同学年の友だちが圧倒的に多いが、児童館への来館回数が多い児童には、異年齢の友だちと遊ぶケースもみられた。放課後の遊び場所としては、来館回数の多い児童は、児童館や近所の公園といった公的空間で遊ぶことが多いが、来館回数が少ない児童は自分の家や友だちの家といった私的室内空間で遊ぶことが多かった。

③ 一般来館児童の来館理由をみると、友だちとの関わりを求めて来館する児童や、プレイリーダーが実施する行事を楽しみにして来館する児童が多くみられるとともに、児童館は雨の日の貴重な遊び場としても認識されていた。また、ひとりで来館する児童の多くは、家にいてもつまらないや、家に誰もいないなど消極的理由も来館の理由として挙げており、児童館を放課後の持て余した時間を過ごす居場所であると捉えていた。

④ 児童館内の遊び実態をまとめると、遊び内容は、静的遊びと動的遊びの両者がみられたが、いずれも相手を必要とする遊びに人気があった。遊び相手は「同学年の友だち」が多かったものの、学童保育在籍児童や来館回数の多い児童には、異年齢の友だちと遊ぶ「交遊」もみられた。また、遊び相手としてプレイリーダーをあげた児童は、友だちと約束をしないでひとりで来館する児童のグループで多くみられた。プレイリーダーが行う児童館行事への参加頻度は、来館回数の多少に関わらず、概して少なかった。しかし、プレイリーダーの得意分野を生かしたオリジナル行事のなかには、子どもたちの遊び心をつかみ、非常に人気の高いものもみられた。

⑤ 児童とプレイリーダーらとの関わり方の実態は、児童側からの働きかけに依存していることが多く、来館回数が多いと関わりも強くなるが、少ないと関わりは弱くなることが浮き彫りになった。また、ひとりで来館する児童はプレイリーダーらとの関わりが強い傾向がみられた。そして、児童館には、新しい遊びを教えてくれたり、積極的に児童と一緒に遊んでくれるプレイリーダーが存在することを児童は望んでいた。

⑥ 児童館に対する評価の結果をみると、児童館に

対する不満でもっとも多かったのは、「5時になったら帰らないといけないこと」であった。また、空間構成に対する不満があげられており、動的遊びと静的遊びが分離できてないことや、施設側の要因による遊びの制限に対して不満がみられた。しかし、多くの児童は児童館で遊ぶことを「楽しい」と答えており、遊び場としてその存在は「大切」とであると答えていた。

(2) 今後の課題

本研究は、今後の都市における子どもの遊び場に求められる条件（①プレイリーダーの常駐、②施設のオープン性、③徒歩圏立地）を具備する可能性がもっとも高い既存の地域施設である児童館において調査を実施した。その結果の要約は前項で述べたとおりであるが、今後、児童館がより多くの児童に認識され、気軽に立ち寄ることのできる地域の居場所となり、遊びを発信する拠点として位置づけられるためには、次のような課題が指摘できる。

① 立地に関して：児童館がより多くの児童に認識され、気軽に利用されるためには、児童の日常生活圏内に設置されること（小学校区に最低1カ所の設置）が重要である。

② 運営に関して：低年齢児だけでなく、幅広い年齢層の児童の利用を促すために、より豊富な遊びや体験のメニューを用意すること、活動の広報を積極的に行うことなど、児童館側から児童や保護者への働きかけが重要である。また、閉館時刻の延長を含む開館時間、日曜開館の検討も必要である。

③ 屋外遊びに関して：質の異なる遊び（動的遊びと静的遊び）の相互の干渉を回避し、多様な遊びを保証するためにも、屋外遊び場を確保することが重要である。しかし、専用の屋外遊び場を設置できない場合は、児童館を接地階に設けて公園に隣接させる、あるいは、プレイリーダーが付き添って屋外に出かける活動日を設けるなどの方法も模索する必要がある。特に、放課後を児童館で過ごすことを余儀なくされている学童保育在籍児童の場合、屋外遊びの機会を保証することは重要な課題である。

④ プレイリーダーに関して：本研究で「プレイリーダー」として位置づけた児童館の児童厚生員は、子どもたちを管理・指導する教師の役割以上に、子どもたちと積極的に関わりながら一緒に考え、遊び、そして、遊びを支援する「プレイリーダー」の役割を積極的に担うことが求められている。児童館の活動は、児童館厚生員の力量に負うところが多く、児童館が地域の

遊び拠点となるためには、その存在がますます重要となると考えられる。今後、児童厚生員の幅広い人材の確保、育成・研修、適正な人員配置のあり方等が検討される必要がある。

本研究は平成 10 年度文部省科学研究費（基盤研究 C2、代表者：瀬渡章子）を受けて行ったものである。また、本研究は堺 真弓（当時、奈良女子大学生活環境学部 4 回生）との共同研究により実施した。なお、本研究については日本家政学会第 51 回大会においてその一部を発表した。最後に、本調査にご協力いただいた皆様に感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 岡田英紀, 仙田 満: 都市化によるこどもの遊び環境の変化に関する研究—横浜市における経年比較調査による—, 都市計画学会論文集, **26**, 61-66 (1991)
- 2) 仙田 満, 岡田英紀: こどもの遊び環境の構造的変化に関する研究—横浜・山形における経年比較調査による—, 都市計画学会論文集, **28**, 763-768 (1993)
- 3) 仙田 満, 三輪律江, 岡田英紀, 渡辺 拓, 矢田 努: 日本における 1975 年頃から 1995 年頃の約 20 年間におけるこどもの遊び環境の変化の研究, 都市計画, 211 号, 73-80 (1998)
- 4) 大村瑋子: 『子どもの声はずむまち』, ぎょうせい, 東京, 155 (1994)
- 5) 小笠原浩方: 『プレイリーダーノート』, ぱすてる書房, 大阪 (1997)
- 6) 梶木典子, 瀬渡章子, 田中智子: プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価—「プレイスクール」における調査事例, 家政誌, **51**, 497-508 (2000)
- 7) 小川信子, 湯本貞子: 児童館—建設過程について—, 日本建築学会梗概集, 893-896 (1972)
- 8) 小川信子, 湯本貞子: 児童館—設計計画上の問題点—, 日本建築学会梗概集, 825-828 (1973)
- 9) 室崎生子, ユミ・ピニエイロ, 市岡明子: 児童館の建築計画, 日本建築学会梗概集, 1329-1332 (1981)
- 10) 小川信子, 湯本貞子, 大島史子: 児童館—学童保育所の併設に関する問題—, 日本建築学会梗概集, 1315-1318 (1978)
- 11) 菊池洋之, 石川 充, 湊谷 浩, 小林千恵子: 都心部と周辺部の児童館規模・配置計画と現状, 日本建築学会梗概集, F, 501-504 (1996)
- 12) 萩原美智子, 北浦かほる: 小学生にみる児童館利用特性, 日本建築学会梗概集, E, 395-396 (1996)